

インターンシップの新しい動き

株式会社グッドバンカー
リサーチチーム

ファミリー・フレンドリー評価では、人材育成の取り組みも評価ポイントの一つとなっていますが、従業員のキャリア形成支援に加えて、社外の人材、特に若者の育成にどのように関わっているのか、という点にも着目しています。その代表的な取り組みであるインターンシップ制度で、新しい動きが出てきています。

インターンシップの対象となる学生は、大学生や高校生、専門学校生が一般的ですが、東京都のある区では、中学生対象のインターンシップを導入したそうです。区内の複数の企業に協力を仰ぎ、約1週間、中学生たちに就業体験をさせるというものです。

当初は学業との関連性が薄いなどの理由で、保護者らの反応は芳しくなかったそうですが、実際には予想を上回る効果もたらされたようです。例えば、インターンシップ実施前後で生徒たちの勉強に対する姿勢が変わって、定期試験の平均点が上昇したり、家庭での感情表現が豊かになったりしたというような事例が見られたそうです。また、実際に中学生を受け入れた企業の担当者の話では、生徒たちの感想文の中に「大人はお金のためだけに働いているのではないということがわかった」という一文があり、とても感動したとのこと。生徒たちにそう思わせた同社従業員の働きぶりもさることながら、今回の経験が生徒たちにもたらした影響の大きさがよく分かるコメントであるといえます。

中学生ぐらいの早い段階から、「自分と社会とのかかわり」を実感できる体験をすることは、「社会とのかかわり方や働くことの意味」を真剣に考えるきっかけを与えることになるでしょう。

中学生の受け入れは、大学生などを対象とする場合と比べて、企業側も対応を工夫しなければならない部分も多いかもしれません。しかし企業の従業員も、生徒たちからフレッシュな視点で質問を受けたり、素直な感想をもらったりすることによって、逆に働くことの意味を気づかされたり、考えさせられたりするということもあるのではないのでしょうか。何よりも、「次世代の育成」という取り組みを通じて社会にもたらされる効用は大きく、つまりは企業のサステナビリティ（持続可能性）にもつながります。